

## 産育習俗資料（その2）

— 愛知県の文献資料を基に —

春日井 真 英

Data on Birth-rituals (ver. 2)

Shinei KASUGAI

This data is a second version of last article, <Data on Birth-rituals called Hashikosi or Hashiwatari, which range over Kitashitara District.>, which was published last year on “Bulletin of TOKAI GAKUEN UNIVERSITY” vol 7, 2002. Here in this article author opens the data of Aich-prefecture only. But the author’s hand there are more data of other prefectures too. Thase data will be open on another occasions.

Author wishes to express thanks here Ms. Akiko Terasawa, the exstudent of Tokaigakuen Junior College, who was very kind to undertake the heavy task of inputting the data from many literatures to computer, which we had managed to gain.

この資料は東海学園大学『研究紀要』第7号（2002年3月発行）所収の続編である。先回の資料は愛知県に限定していなかったが、ここでは愛知県に限定して採録してみた。

すでに、愛知県の他に静岡県、三重県、岐阜県などのデータも収集されているが、まだまだ資料収集には時間がかかり、収集終了までの見通しが立たないためにこれまでに得た資料をデータ化しておくことにする。先回に引き続き、資料作成には東海学園女子短期大学平成7年の卒業生の寺沢明子女史の協力を得た。各地の県史、町史、民俗誌など様々な文体からの入力は大変な仕事であり、ここに感謝の気持ちを表しておきたい。

## 産育習俗(2)

No.	資料名	発行年月日	編集・編集	住所	地域	出産	産明け		鳥居参り(宮参り)	橋渡り・橋越し	インノコ	川開運	井戸開運	一年目の行事			
							男児	女児									
1	天白村誌	S31.5.3	陣田庄太郎	名古屋市中昭和区天白町大字上八事字旗本83	天白村	無記述	無記述	無記述	無記述	無記述	無記述	無記述	無記述	無記述			
2	猪高村誌	S64.6.7	無記述	名古屋市中区千代田5の70の32	猪高村	無記述	無記述	無記述	無記述	無記述	無記述	無記述	無記述	無記述			
3	安城	1980.03	郷土部本「安城」編集委員会	安城市	安城市	無記述	33日目	34日目	娘が美家の母が連れて行った。	無記述	無記述	湖のさす川をまたいではいけない。	産後は産後15日脚井戸から水を汲んではいけない。	無記述			
4	千秋村史	S31.10.1	千秋村史編集委員会	一宮市千秋町佐野2950	千秋村	初産は概して妻家へ帰って産む例となっている。	31日目	30日目	男児が男子なる時は31日目、女児は30日目に氏神へ参拝に赴き、佛塗顔見せと親族故旧の家へ立寄り、供の丸子服の紐に括りう、是の意味は子の長寿を祈るの意。	無記述	無記述	無記述	無記述	無記述			
5	桑田村史	S42.8.15	桑田村史編集委員会	大山市宇若宮80番地	桑田村	初産は概して妻家へ帰って産むが習慣であるが、次子よりは産家で産む。	31日目	30日目	男の子だと32日目、女の子は31日目(女は月々のツトメをするので一日少ないという)に産家に帰る。これをオプアガリという。この日までは忌みがかかっている。川を渡つたりしてはいけない。この日オプノカミサマへオミヤオコワイを供える。二つ小石をお膳の上にのせる。そのときオミヤマヤイリをする。そのとき赤んぼに着せるのがオプキマである。イソメヤヒチヤの書物は在所からもらうがオプキマの代は在所と産家と半々にするのが通例である。オミヤマヤイリのとき近所の人たちがオプキマのひもにシンプカを結びつける。昔は穴あき銭にオを通して結んだ。	無記述	無記述	無記述	無記述	無記述	無記述	無記述	
6	岩倉町史	S30.3.28	岩倉町史編さん委員会	愛知県丹羽郡岩倉町	岩倉町	お産または三コロコヒといっている。オダイインコウでは特別の部屋があった。蔵のひさしのごころに、産のはいった一部屋があつてお産はきまつてそこで一般という実例がある。しかし一般には特別な産室はなかつた。明治初年までは次のような仕方でお産をした。黒一しよをあげ、楯できよめたミシロを二つ折りにして敷く。そこへ阪をおおき、それをボソココ(布きわ)でおおき、その上にお産をする者がおおい、その年の産方(産きの方)を向かす。お産をする者の後には人がひかえていて、産室の乳の上あたりをしつかと物まじめてやる。トリアダバハガはその産にいてもたえずわつていたので手をかけない。	32日目	31日目	男の子だと32日目、女の子は31日目(女は月々のツトメをするので一日少ないという)に産家に帰る。これをオプアガリという。この日までは忌みがかかっている。川を渡つたりしてはいけない。この日オプノカミサマへオミヤオコワイを供える。二つ小石をお膳の上にのせる。そのときオミヤマヤイリをする。そのとき赤んぼに着せるのがオプキマである。イソメヤヒチヤの書物は在所からもらうがオプキマの代は在所と産家と半々にするのが通例である。オミヤマヤイリのとき近所の人たちがオプキマのひもにシンプカを結びつける。昔は穴あき銭にオを通して結んだ。	無記述	無記述	無記述	無記述	無記述	無記述	無記述	七夜の日きれいな小石二つを拵つて来て、洗ひきよめ、それをオプノカミサマとしてお膳にのせ、御馳走を供える。この小石はその後のたんじようにもまつていろいろお供えをする。オコワイ・オミキマなどをオプノカミサマに供える。魚類・煮物(五色)・菓子(ひたひた)などをごしらえて祝う。ハマヤやハネを祝つてもらつた家へは、タンジヨウモチーカざりすつを配る。タンジヨウモチはオプアガリ(少し細長い形)にするのが普通であった。

No.	資料名	発行年月日	編集・編集	住所	地域	出産	産期		鳥居参り(宮参り)	橋渡し・橋越し	インコ	川関連	井戸関連	一年目の行事
							男児	女児						
7	阿崎市史 第八巻	S5.4.15	新堀阿崎 市史編集 委員会	阿崎市十 工2-9 阿崎市役 所	山細町 竜泉寺 町 河合地 区 滝町 蓮生町 奥殿町 米河内 町	無記述	30日	30日	30日に初参りとして産児に眼服を 纏はしめ産土神に詣づる。此時 祝として赤飯や餅をくばる。	無記述	無記述	無記述	無記述	満一ヶ月年に誕生祝い を爲す。
	新堀 阿崎市史 史料 民俗19	S59.9.30	新堀阿崎 市史編集 委員会	阿崎市十 工2-9 阿崎市役 所	山細町 竜泉寺 町 河合地 区 滝町 蓮生町 奥殿町 米河内 町	出産は妻家の納戸・奥の間など、 北の便所に近い所が多かった。 山細町では西北の部屋と言っ ている。普段自分が使っていた部 屋という所も多い。産屋の設備 が村にあったとか、土間で出産 したなどは、ほとんど聞か ない。竜泉寺町では、百年くらい前 には、各寮で産屋を別に作っ ていたと言っている。産床として、 灰を入れたむしろの袋、つまり、 わらのハイブトン(灰布団)の上 で出産した(中町・竜泉寺町)。 座って方言で、チョゴンデワ ら布団やわらにもたれて産んだ という所が多い。河合地区では、 明治時代は皆産産であった。滝 町では、大正ごろまで産産であっ たと言っている。滝町では、わ ら二把あるいは布団に寄りかか り、専方に向かった姿で産んだ と言ふ。蓮生町では、汚れでも よいような布団を敷き、ふすま などのへりにつかまって、正座 の姿勢を崩した状態だ、かかと を手で押さえて産んだ。奥殿町 では、初産のときは産産で、二 回目からは寝て産んだと言ふ。 産産のときの産所での力ひも や竹などの使用は、余り多くは 聞かれないが、竜泉寺町では力 ひもを、中町では力ひもや竹を 用意したと言ふ。	31日 米河内 町 32日 河合地 区 中町 33日 米河内 町	31日 米河内 町 32日 河合地 区 中町 33日 米河内 町	参拝者はしゅうとめに拘かれ、 滝町、梨栗町、竜泉寺町、羽栗町。 しゅうとめまたは仲人に拘かれ、 (中町)。里の母親としゅうとめ に伴われて(岩津町、米河内町、 河合地区。里の母親のみ(奥殿 町、細川町、井ノ口町、伝馬通)。 妹(康生通)。嫁は行かなかつた(伊 ノ口町、滝町、梨栗町、康生通)。 参拜先は氏神に参る(奥殿町、安 戸町、米河内町、河合地区、中町、 羽栗町)。男女によつてお参り 先の区別は無いようであった。 宮参りは鳥居前までであった。 110日の宮参りでは、上まで上が た。蓮生町・本宿町では、神社で、 一滝でもオシッコをして、村 (オフスナさんの仲間入り(氏子 入り)をさせてもらったと言ふ。 おえ物へは、氏神へは、お神酒と オヒネリ(おさい様)を供えた(米 河内町、中町)。(羽栗町では、オヒ ネリのみを供えた。お神酒と神 食(赤飯、洗米など)を持って行 き、子供の無事成育を祈願して、 さい錢は上げなかつたと言ふ (河合地区)。また、中町では、男 子は、着物のひもの所に、犬張り 子を麻糸でくくり付けて行き、 神前に供えてきたと言ふ。上衣 文町では、今でも、80円と800円 を包んで、この犬張り子に縛る。	産後、産婦は36 33日または35 日、川の橋 を渡ってはい けない(奥殿 町・米河内町・ 中町)。竜泉 寺町では一か 月間忌まれた。 安戸町では橋 の端忌みかっ た。梨栗町で は、乳が切れ るからと言っ て、七夜前 に橋を渡って いけない。七 夜前には てはいけない (河合地区)。 赤不浄の時川 で洗濯や橋渡 りなどをし てはいけない (佐作北地区)。	おむつを川へ 洗いに行くの も一週間(米 河内町、ま たは7日まで、 た水くみも一 週間いけな いとされた(中 町)。	河合地区では、 自宅分家の場 合、産後15日 または12日ま たは7日まで、 井戸の水くみ は嫌われた。 竜泉寺町では、 井戸は7日ま たは16日間使 用を禁せられ た。	一年目の誕生日にも ち(誕生もち、一升) をつつき、子供に背負 わしたと言ふが、戦 前までであった。祝 いの品が贈られると いうことは無かつた (河合地区)。初誕生 に豆餠を炊いた (中町、竜泉寺町)。 中町では、これを七 夜のお返しとして配っ たり、宮参りをした。 竜泉寺町では、誕生 もちを近所・親せき へ配った。滝町では、 三つ祝い、ほかま着、 髪置き等とともに、 初誕生に客を招く家 もあるが、普通は、 赤飯を配るだけであ ると言ふ。	







No.	資料名	発行年月日	編集・編集	住所	地域	出産	産明け		鳥居参り(宮参り)	橋渡し・橋越し	インノコ	川開運	井戸開運	一年目の行事
							男児	女児						
豊田市史 五巻 民俗	豊田市 教育委員 会	S61.4.1	豊田県豊 田市西町 3の60	王大滝 寺部町 中金町 瓜幡町 前林町 下市場 町 貝津町	産婆(職業)が扱うようになってから、産産が多くなったというが、その以前はほとんど産産であった。産産はかたりのちまで見られた。この地方のことでは、「ちよこんで(賑って)産んだ。玉瀬町でも、昭和の初めまでは産産で産んだが、「ちよこらひも」や竹は産産かかった。産産を呼ぶこともあったという。寺部町でも、産産かたんと産産を背に、産産で産んだ。「ちよこらひも」や竹の使用はなかったという。貝津町では、板の間の「納戸いこむしろ」を敷き、その上に「灰産ぶんどん」をのせ、そこに産産で産んだ。太い柱に「ちよこらひも」をつけていたという。古名は、明治の終わりで産産であったという。中金町では、産産の場合に、「ちよこらひも」や竹を使わず、かかとで産産おさき自分で産んだという。瓜幡町では、大正末まで、人の肩をつかんだり、あるいは「ちよこらひも」をぶら下げ、それを持って産産したという。前林町では、灰を入れた(血をとるため)「わらぶんどん」の上に向きを握り産んだが、自分の首に手ぬぐいをかけ、りきんだときに、両手で自分の手ぬぐいを引っ張った。男は、これを見てはいげないとき	31日目	33日目	産後33日目初宮参り。産婆は75日目に行く。子どもの服装は在所から贈られた「晴れ着」、すなわち「産産」を着せて行くところが、多い。神楽参りと称す(下市場町)。しゅうとめが子どもを抱き、産婆はお神酒と「洗米」・塩を持ってついでいき、鳥居先でそれらを断る。鳥居の「注連」が横で、それより中には入れなかった。鳥居の前(右側)に大きな石が置いてあり、そこに置いた。お神酒は石にぶちやける(ぶちやける)が、「洗米」は残る。また、一般に紙に包んだ「おひねり」にしたさい銭をおける。産婆は訪問書に献付きの羽織だが、留袖の場合もある。しゅうとめはお寺参り程度の服装だった(寺部町)。お神酒(二合ひん入)、「おこわ」のおにぎり、お菓子を持ってお参りに行く。それを、中の家に寄って、食べてもらう。連れて行く人は、平服で行った(玉瀬町)。宮参りには、在所から贈られた「初着」を着せて、しゅうとめが連れて行った。しゅうとめはお寺参りの服装で「さい銭」は「おひねり」をさい銭箱に、10銭くらい入れた。ほかにもちとどうそくをおあげた(中津町)。	父類と祖母(しゅうとめ)が子どもを連れ、塩を持参してまいてくる。奉納金は一銭くらい(酒とお茶代)とのこと(熊鷹町)。氏神への宮参りは、しゅうとめ・産婆・子どもで行き、これを「三日の坂参り」という。坂で、産産を抱下ろして泣かせ、その存在を神に知らせる。氏神様にささげたまんじゅう108個を帰り道に出会った人に配る(瓜幡町)。	無記述	無記述	無記述	日明けの(男児31日、女児33日)まで井戸水を汲まない(喜多町)。出産の場合20日間は井戸水を飲まない(貝津町)。	無記述
				鶴舞町 瓜幡町		33日目	33日目	宮参りには産婆・子ども・しゅうとめで行き、鳥居先でお神酒をおげ、「百十日」を過ぎて、拝殿で参る。子どもには在所で用意された産産を着せて行く(貝津町)。						
				貝津町		110日目	110日目	姑が連れて行き、一昔前は子ども名前を書いた紙に、「洗米」(かした米)・狐・「さい銭」を持って氏神様に参った(吉原町)。						
				吉原町		75日目	75日目							

No.	資料名	発行年月日	編集・編纂	住所	地域	出産	産明け		鳥居参り(宮参り)	橋渡し・橋越し	インノコ	川開運	井戸開運	一年目の行事
							男児	女児						
22	牟呂吉田村誌	S8.6.7	白井栲里	無記述	牟呂吉田村	無記述	無記述	無記述	無記述	無記述	無記述	無記述	無記述	無記述
23	豊橋市史第三巻	S58.3.31	豊橋市史編集委員会	無記述	豊橋市	出産は多く婚家の納戸で行なわれた。納戸には竹の箕子で寝んだ三尺四方位の場所が酒の方に作ってあったり、墨をあげて坂の間にしたりして藁藪を敷いたり、古布団に油紙を敷いたりして産んだ。	100日目	100日目	無記述	無記述	無記述	無記述	無記述	無記述
24	西尾町史下巻	S9.4.30	青山善太郎	愛知県橋豆郡西尾町西尾町夜場	西尾町	無記述	無記述	無記述	無記述	無記述	無記述	無記述	無記述	無記述
25	西尾町史下巻	S63.2.10	西尾市役所	無記述	西尾町	無記述	無記述	無記述	無記述	無記述	無記述	無記述	無記述	無記述
26	半田市誌本文篇	S46.11.30	愛知県半田市	無記述	成岩地区	初産は実家で行った。神のいないとされている納戸で出産する。	33日目	33日目	男女児とも出生して33日目に行なう。男児は紋付、女児は友禅模様の着物を着せて、祖母あるいは姉妹が抱いて母乳といっしょに氏神に参拝する。このときおひなりや酒などを持参する。酒は石段の石へかけてくるころもある(成岩地区)。家では尾頭つきの魚や赤飯で祝う。	無記述	無記述	無記述	無記述	出生して最初の誕生日に、婚家ではおこわか紅白の餅をつくり雛飯入配る。これを誕生餅という。その返礼に下駄や靴が贈られる。
27	新修半田市誌下巻	H1.11	半田市誌編さん委員会	愛知県半田市桐ヶ丘4丁目7番地の3	成岩乙川	初産は実家で行い、第二子からは婚家で出産した。出産は、神のいないとされる納戸で、下へ油紙を敷き、前に布団を高く積んで、それにもたれかかり、産婆の手助けで行った。	32日目	33日目	出生後男児は32日目、女児は33日目に氏神へ宮参りをする。男児には紋付、女児には友禅模様の着物を着せて、祖母が抱いて母親と一緒に神酒とおこわをもつて参拝する。酒は石段の石へかけてくるころもある(成岩)。途中で親縁へ書くと、産り子の水を肩へかけてくれるころもある(亀崎)。家では、尾頭つき魚や赤飯で祝い、親縁縁者へも赤飯を配った。出産祝いをもらった家へは、お返しとして、あん物のまんじゅうか練り物(鯛・松・玉袋など)と赤飯を配る(乙川)。	無記述	無記述	無記述	無記述	最初の誕生日を初誕生とよんで、紅白の餅を作って親類や知人に配った。これを誕生餅という。そのお返しに下駄やぞうり、靴を贈った。成岩地区では、足形の誕生餅をつくって、通る年は13個、普通の年は12個配ることになっていた。
28	碧南市史第三巻	S49.4.5	碧南市史編集会	無記述	碧南市	無記述	32日目	33日目	生後、男は32日、女は33日に氏神に無事の成長を祈願する。これを産土詣(うぶすなもうで)と称しているが、氏子入りの意味が濃い。	無記述	無記述	無記述	無記述	無記述

No.	資料名	発行年月日	編集・編集	住所	地域	出産	産明け		鳥居参り(宮参り)	橋渡し・橋越し	インノコ	川関連	井戸関連	一年目の行事
							男児	女児						
29	赤羽根町史	S43.11.1	赤羽根町史編集委員会	愛知県瀬戸市美都赤羽根町	赤羽根町	無記述	無記述	無記述	出産後3日目、7日目の日には産の神様にお頭づきの魚を供えて子供に成長を祈った。生後33日目に宮下参り、100日目に夫婦揃って、安産のお礼参りをする。生後100日を経過すると氏子に仲間入りするために産土神に参詣する。この時は別に祝というほどのことはしない。	無記述	無記述	無記述	無記述	満一ヶ月の誕生日には、普通の年には12個の石を持ってお参りする。石のように固く肩つよよに言う意味で持つて行く。うるうの年には、13個の石を持ってお参りする。
30	佐織町史 通史編	H1.11.3	佐織町史編さん委員会 佐織町史調査編集委員会	愛知県海部郡佐織町大字諏訪字池理500の1	根高小津勝幡	第一子に限って、吉日を選んで美家に帰る。美家に帰った月日から、出産後、婚家に帰る月が足かけ三ヶ月になると、ミツキゴシンドといって、婚家に行やがられるので、これを選びように計算して美家に帰った。お産をする部屋は、たいてい、母屋のナンドである。床が簀の子になっている家はまずなく、油紙を敷き、その上に、ワラ灰を入れたワラフトン・ハエブトを敷いて、汚れが布団の中に浸み込むようになっていた。産婦が始まると、産婆をよびに行き、妊婦は産室に入る。以前は産室であったという。産室になると、地泉院で覆けてきた米粒を鉢むと菜になるといわれている。ワラノカミとよばれる丸石を神願戸に担がる家があり、ワラノカミを願い念じれば菜になるともいう(根高)。	33日目 33日目 小津	32日目 30日目 小津	生児の忌明けをカリアガリ・ユミアケといい、この日が生児の初外出の日であり、第一子の場合は婚家への引き移りの日でもあった。引き移るとき、美家から婚家に子供の荷が届けられる。子供の着物やモフリドウギなどの入った長持・たんすのほか、乳母車、夜具一式といった道具をリヤカーなどに載せて持参する。子供の荷は嫁の荷と似ているが、ムラ外れの荷の引き渡さしはしない。美家を出ると、美家のムラの氏神様に参拝し(家によつては参拝しないこともある)、婚家のムラの氏神に参拝する。氏神参拝には、酒と盃・洗米・するめ・駄菓子を持参し、拜殿に酒と洗米・するめを供える。近所の子供たちが集まってくるので、子供たちに祝ってもらおうといって、菓子を子供たちに配る。美家からはオオヒツ(大櫃)に入れた赤飯やオコロイを持参し、シンセキ・トナリ近所に配る。	無記述	無記述	無記述	無記述	初誕生には、美家からタラジ・ウモチ(誕生餅・アソガタモ子(足型餅)か贈られてくる。片足分だけで一升はある大餅である。二個の餅を風呂敷に包み、子供に背負わせる。歩くのもおぼつかないころであるから、親が背負う喜似ごをさせる。丈夫に歩くことを願うという(勝幡)。七夜祝いに招いた家の分の紅白餅を持参して、配ることもある。
31	佐屋町史 通史編	H8.10.14	佐屋町史編集委員会	無記述	佐屋町	昭和20年代までは多くの人が、初産は美家で出産した。産室は納戸といわれる座敷の裏の部屋であった。産婆さんと呼ばれた助産婦に妊婦当初から診察してもらっていた。	31日目 32日目	32日目 33日目	男児は31日、32日女児は32日、33日に「宮まいり」をする。宮まいりには姑が付添う。	無記述	無記述	無記述	無記述	無記述

No.	資料名	発行年月日	編集・編集	住所	地域	出産	産明け		鳥居参り(宮参り)	橋渡し・橋越し	インノコ	川関連	井戸関連	一年目の行事	
							男児	女児							
32	飛島村史 通史編	H12.3.31	飛島村史 編さん委 員会 飛島村史 調査編集 委員会	愛知県海 部郡飛島 村竹之郷 3丁目1 番地	飛島村	初産だけは実家に帰る人が多かっ た。出産予定の1か月前ころに、 姑さんに送ってもらい、それか ら三か月以内に婚家に帰らねば ならなかった。三月初しになる のを嫌った。出産は、納戸で、 灰ふとん、灰むしろなどを使っ て手際よく行われた。	31日目 32日目	32日目 33日目	無記述	七夜(ヒチャ)に産婆さんが、赤ちゃんの髪を剃り、額には、食紅で小さな丸印を二つ横に並べて付けた。	無記述	無記述	無記述	婚家で、足形の誕生もちを配って祝った。もちを返した。たを返した。ただこれは長男の場合に限られていた。	
33	八開村史 民俗編	H6.3.1	八開村史 編さん委 員会 八開村史 調査編集 委員会	愛知県海 部郡八開 村大字江 西字大縄 場161番 地の1	赤目 給父 江西	お産の場所はカリヤと呼ばれる 出産のための仮り小屋を準備し ておいたようである。しかし詳 しい伝承や実際に利用したとい う体験などはまったく聞くこと ができなかった。お産は、納戸 の畳をはずして、準備しておい た灰布団を敷き、ここで寝た姿 勢で生むのが一般的であったと いう。古くは産んで生む産も あったという話を聞いたこと があるが、体験者はなかった。 「横むき産」ということは聞 かれた(赤目)。	33日目 (9例)	32日目 (9例) 33日目 (4例)	無記述	無記述	無記述	無記述	無記述	ヒトダンジョンウには「足型餅」といって、一升分のもち米で丸餅を作り、本人の両足跡を餅につけて、紅で形を色づけしたものを作り、これを風呂敷でしよませて歩かせた(江西ほか)。	
34	稲武町史 民俗資料 編	H11.1.31	稲武町教 育委員会	愛知県北 設楽郡程 直町大字 程直字竹 ノ下1-1	程橋	出産の場所は玄圃から見一番 奥の間(窓を入れない八畳の暗 い部屋・若夫婦の寝室)になっ ていた。イロリの灰を木綿の布 で包んだハエブトンの上に布を しき、その上にカッパ(油紙)を しいた。そしてカプリブトンで おおった。このとき、布は自分 で纏ったものが一般的であった が、綿は買ったものであった。	33日目	28日目	無記述	無記述	無記述	無記述	無記述	無記述	内祝いとして行われる。このときには「誕生餅」についてこれを親類と産婆様に配る。この地の誕生餅は一升餅を背負わせるというこは行われず、餅餅くらしいの大きな餅を授けて赤ん坊がそれを抱ててかじつたら丈夫に成長するといわれてる。また、初誕生まで歩いた子供には餅を背負わせて歩かせる家もあった。

No.	資料名	発行年月日	編集・編集	住所	地域	出産	産明け		鳥居参り(宮参り)	橋渡し・橋越し	インノコ	川関連	井戸関連	一年目の行事	
							男児	女児							
					小田木	特別の部屋はなく、普段使用している部屋(部屋)は出産のときには畳を上げ、藁やぼろきれなどを敷く)で出産した。陣痛がはじまってから部屋に入り、出産となった。また、産産のときは前で手を握ってもらう。さらには産産のときは後ろから腰を抱き抱えて押してもらう。	33日目	23日目	ヒアケの日には、姑と母親が子供を連れて氏神様(八幡神社)にお参りにいった。この日を頃にしてお参りになったという。	無記述	無記述	無記述	無記述	初産生には紅白一重の餅を近所に配る。また、實に子供を入れて、餅をぶつける。その餅を子供が食へれば運がつくとか、丈夫に育つとかいっていた。	
				中当		かつては産産であった。産婆さんを頼むようになってから産てのお産になった。明治から大正初年ごろのことである。産産のころは布団を積んで、それにもたれるようにして出産した。出産をする場所は、いつもいる所でハヤという。初子を在所で出産することもなく、ハヤである。	33日目	21日目 ～23日目	オビアケまでは母親は氏神様のお参りしてはいけないことになっていた。	無記述	無記述	無記述	無記述	初産生には餅をついて、オサンバサンをはじめオヒチヤヤに招いた人たちに配る。子供を大きな實に入れて、餅を投げ、その餅を子供が食へれば丈夫になるとか、一升餅を背負わせて歩かせたりする。初産生のときに余りにも簡単に一升餅を担いで歩いてしまうと、とくに女の子などは家に落ち着いてしまうといわって無理に振はせることもあったという。	
				夏焼	産屋は特別にあるわけではなく、出産時はハヤでアキノカタ(明の方)に向かっしてするものだとわわっている。出産の方法としては、明治19年生まれの人のころは産り産であったが、明治42年生まれの人は産産であった。出産時には、ハヤの敷物をはねて、焼きぬか、または焼いた藁を布団がわの中に入れていたものを布団程度(の大きさ)をつくり、それを敷いて出産をする。産後、敷いていたものは、縁の下・産屋の下・藁などのアキノカタと呼ばれる方位にすてた。	33日目	21日目 28日目	ヒアケがすんでから、母親の力がついてくると(産後の肥立ちがいい)、子供に絞付きを着せて、氏神様にお参り行く。このときは姑が子供を抱いていくものとされ、これをハツマイリクといわって、嫁・姑でヒアケの餅をもって嫁の住所に挨拶にいった。	無記述	無記述	無記述	無記述	無記述	無記述	初産生にはイットウミ(簾)の中に子供を隠入れ、周囲の物が産生餅をぶつける。この餅を子供が拾って食へると、その子は強くなるといわれていた。かつてはこの日に隣近所に餅を配った。

No.	資料名	発行年月日	編集・編集	住所	地域	出産	産明け		鳥居参り(宮参り)	橋渡し・橋越し	インノコ	川関連	井戸関連	一年目の行事	
							男児	女児							
35	津具村誌	無記述	津具村	無記述	上津具 下津具	初の子であっても嫁ぎ先で出産する場合が多かった。出産の場所は「お八ヤ」と称した若夫婦の隠室が建てられた。明治の頃までは、出産に際してはウブヤという仮小屋が用いられ、暗い林の中にウブヤの跡が伝えられているところもある。出産の時には、汚れものが下に通らないよう、藁爪やコタツのジロ灰(木の灰)を布の中に入れて布団のようなものを作り、これを油紙の上に敷いた。難産の場合は天井から力綱を下げ、産褥がこれにつかまって産む産産がおこなわれた。	30日目 35日目	45日目 30日目	ウブヤケケ(ウブヤアケ)に際して宮参りを行うが、ウブヤが明ける日数については、男の子の場合は30日、女の子の場合は45日、あるいは男の子が36日、女の子が30日など様々に語られている。この時は、母が子を背負って一人で、あるいは姉が付き添って神社に出かけた。ムラに大きな神社のないところは、組の小祠にお参りに行った。お宮に行くときは必ず橋があるのでこれを渡る。この時は、赤ちゃんに着せる友禊の重ねの掛け着が二枚、嫁の在所から贈られた。	ウブヤが完全に明けるまでは橋を渡ってはよそに行くことはできなかつた。お宮参りに行くときは必ず橋があるのでこれを渡る。	無記述	無記述	無記述	無記述	重ね餅の誕生餅を婿家であつて、向こう三軒両隣、嫁の在所、分家くらゐに配り、お祝いに招待する。この日は、子供を菓の中へ座らせて誕生餅を背負わせ、招待された人が小さな餅を子供に向つてなげた。餅をもらった嫁は、女衆があつたので、女衆があつたの時にお返しとして、下駄、足袋など、あるいはおもちゃやお金をくれた。
	豊根村誌	H1.10.1	豊根村 監修 安藤慶一郎	愛知県北 設楽郡豊 根村大字 下黒川字 藤平2	牧舟 石壺 大沢	夫婦の部屋は六畳程度で、家の裏側の部屋が多い。ここに藁布団を敷き、その上に油紙または小さな綿布団を重ねて敷き、仰向けの姿勢で産んだ。介添えには経験のある近所のトリアゴオパー(昭和)になって産婆を頼んだ。	30日目	20日目	生まれてから、女兒の場合は20日、男児の場合は30日目の日をトコアゲといい、産婦は棒と塩でもって体を清めた。ハシノロエ・ヒトツブグイ・ヒトツブナメ・ヒトツブ祝いなどともいい、生後100日目に食い初めの行事がある。お膳をつくって、その前にアガムボウを据え、食べさせる真似をした。また、この日に宮参りする家もあり、これをモモカマイリ(百日参り)といった。	無記述	無記述	無記述	無記述	実家の親、仲人、濃い親戚・近所の人を招き、酒肴・赤飯などを出して招待する。箕の中に子供を座らせた。誕生餅を背負わせ、誕生餅を背負わせたり、肩に束せたりする。また男児の場合は、農具・そばん・すすり五など、女兒の場合は、物指し・針などを前に並べて子供に好きな物を取らせ、取った物によって子供の将来を占つたりした。誕生餅も配った。	
	明治村誌	無記述	堀田治三 郎 その他5 名	無記述	明治村	産目に至れば妊婦は里方に歸りて分娩す。出産すれば湯初を祝ひ、腹餅として婿方より餅又は糯米を贈り親戚隣保に配分す。帯祝の約半量を普通とす。	無記述	無記述	宮参りとして娘又は葉子の頬を供へて産土神に詣つ。	無記述	無記述	無記述	無記述	誕生には足型の餅を親戚間に配分して成長を祝ふ。	

No.	資料名	発行年月日	編集・編纂	住所	地域	出産	産明け		鳥居参り（宮参り）	橋渡し・橋越し	インコ	川関連	井戸関連	一年目の行事
							男児	女児						
38	師勝町史 S36.7.1		師勝町史 編纂委員 会	愛知県西 春日井郡 師勝町	久地野 鹿田	産室はナンドと決まっていたよ うである。ミシロを二つ折りに し、その間に灰を入れる。そこ へ布を二重にしてしきそれにも 灰を入れる。その上に妊婦がす わり、すわったままでお産をし たものである。初産はヨメの在 所であるならわしになっている。	33日目	32日目	男の子は33日目、女の子は32日 目に産家へ帰る。これがオプア ガリである。このとき在所とム コ方と向方のウブスナママとい う。身内のものや近所のもの が、オプギのヒモにシラガを結 びつける。天保銭二文・三文・ 五文祝いだから一文は忌まれ るなどをオにたとおしたもので ある。このシラガはダイトコロ のカモイにつりさげおき、翌 年の14日おろした。	無記述	無記述	無記述	無記述	七夜の日、形のよい 小石を二つ拾って来 てきれいに洗ひ、オ ブノカミサマといっ てお膳にのせ御馳走 を供える。この小石 は、その後、年ごと のタンジヨウワイイ にもお膳にのせる。
39	西春町史 通史編 1	S68.11.1	西春町史 編集委員 会	愛知県西 春日井郡 西春町 大字西之 下字清水 15	西之保 沖村 下之郷 宇福寺 九之坪	初産はヨメの在所でするのが通 例である。	33日目	32日目	男の子は33日目、女の子は32日 目に産家へ帰る。これがオプア ガリである。帰つたあとオミヤ マイルリをする。	無記述	無記述	無記述	無記述	無記述
40	春日村史 資料編	S63.3.31	春日村史 編集委員 会	愛知県西 春日井郡 春日村大 字落合字 振形 129 番地	春日村	無記述	無記述	無記述	無記述	無記述	無記述	無記述	無記述	無記述
	春日村史 現代編	S63.3.31	春日村史 編集委員 会	愛知県西 春日井郡 春日村大 字落合字 振形 129 番地	下之切 落合	初子のときは、妊婦は在所へ帰っ て出産するが、出産予定日の一 か月ほど前から帰る。夫勝・大 安・成の目を運び、三隣亡・先 真の日はさけるようにした。産 家では、実家へ預けるといっ で、嫁の分の米や味噌・醤油を 持たせ、赤飯を蒸して送り出し た。実家にいる期間は、三月掛 けになるのはいかぬといっ て、どうしても日が重なると思は れ、一晩だけでも産家へ帰るよう にした。出産は、ナントでハイミ シロ（灰布団）を敷いて、その上 に座つた座席。ハイミシ ロはミシロ二枚を袋状にして、 木灰で堅いといっ て、その袋の中に入れておいた のであり、蓋をあけた縁板の上 にミシロ（ムシロ）を敷き、その 上に蒲団、ハイミシロ、ホロ布、 オコシ（腰巻き）の古いものを順 に重ね、蒲団を三つ折りにし、 それに背をもたれるようにして、 ハイミシロのミミを握つて座つ た。このとき、手巻紙や御膳で 使った燃え残りのろうそくを灯 すつと安産であり、産産のおり は軽くなる(下之切)。	33日目 下之切 32日目 落合	32日目 下之切 31日目 落合	男の子は33日、 女の子は32日 (下之切)、ある いは32日と31 日の産婦 の忌明けともな った。産後は、 柿の木の下を通 ると血の道が出 るといわれ、こ の日は32日と 31日(落合)と 日が産婦の忌 明けともなっ た。産後は、 柿の木の下を 通ると血の道 が出るといわ れ、この日は 32日は産を渡 ることはできな かった。	無記述	無記述	無記述	無記述	足型の紅白の誕生餅 は、産家で焼いて置 い親戚には配った。 オダイシユウでな ければ、とても近所ま で配ることはできな かった。餅をもちら つた家では誕生の祝 いといって、子供の 靴履き物をお返し する。

No.	資料名	発行年月日	編集・編集委員	住所	地域	出産	産明け		鳥居参り(宮参り)	橋渡し・橋越し	インノコ	川関連	井戸関連	一年目の行事
							男児	女児						
42	春日村史 復刻版	S63.3.31	春日村史 編集委員 会	愛知県西 春日井郡 春日村大 字笠合字 振形 129 番地	春日村	初産は30歳の在所ですのかわらわしてある。在所で産するときはムコの方から、でないときは在所から、ウブモチを一つとどける。これはカモチといって嫁が食べる。	33日目	32日目	男の子ならば33日目、女の子は32日目で嫁家へ帰ってくる。これがオブアガリで、帰ってくるにシユウトメが運れて、氏神へオミヤマイリをする。	無記述	無記述	お産のために命をなくした人のために力ワセガキが行われる。	無記述	七日目が子で、昔は氏神から小石を二つ拾って来て洗って浄め、オブノカミとしてお膳にのせ御馳走を供えた。この小石は、それから毎年タンジヨウ祝いにお膳にのせたものである。
43	小原村誌 復刻版	S39.7.1 S67.3.1 (復刻版 印刷)	小原村誌 編集委員 会	愛知県西 加茂郡小 原村大字 小原村役 場	小原村	出産が近づくとも産屋を設けた。別屋に設ける場合と、住居の中に一部屋を産屋にする場合があった。これは出産に伴う汚れ、血の不浄を怖れる心持ちから忌むもので、特に火の忌を重大視し、産婦と手伝い人の外は近づくことができません。21日ないし30日前後の間きびしい別火の生活が守られた。これは明治中期まで、大正に入っても明るく厳格な家ではなお実行せられていた。	33日目	無記述	出生して初めての秋祭りに、神社へ重箱に供物を入れて持参し初参りし、神官のおはらいを受ける。	無記述	無記述	無記述	無記述	満一年の誕生祝い。一般には家で赤飯を炊いて祝う程度であるが、誕生前に歩き出した子には、一升の餅を負わせて助け歩かせ、後でこの餅を小さく切って、近親縁者にくばった所もあった。
44	大口村誌	S10.8.15	野田正昇	愛知県丹 羽郡大口 村 大口村役 場	大口村	無記述	33日目	31日目	男児は33日女児は31日に宮詣りと云つて、子供に騎籠をかざつて氏神に神酒を供へて参拜させる。	無記述	無記述	無記述	無記述	無記述
45	大口町史	S67.2.	大口町史 編集委員 会	愛知県丹 羽郡大口 町下小口 7丁目155 番地 大口町役 場	大口町	出産予定の7、8日前に赤飯をたすさえ在所に降り出産にそなえた。昔から第一子は里(在所)で出産する習わしがあった。出産のことを「ヨロコビ」とよんだ。	32日目	31日目	初宮参り(うぶすなまいり)、男児は32日目、女児は31日自家によって多少異なる)にそれぞれ盛装し、相母がつきそって氏神様に参拝する。	無記述	無記述	無記述	無記述	一年目の誕生日には、“誕生餅”を近親へ配る。近親ではこれを祝い、お返しに足につける品物(夕七、ゲタ)を贈るところが多い。
46	扶桑村誌 下巻	無記述	無記述	無記述	扶桑村	無記述	33日目	31日目	男児は三十三日女児は三十一日に宮詣りといつて、子供に騎籠をかざつて氏神に神酒を供へて参拜させる。	無記述	無記述	無記述	無記述	無記述

No.	資料名	発行年月日	編集・編集	住所	地域	出産	産明け		鳥居参り(宮参り)	橋渡し・橋越し	インノコ	川関連	井戸関連	一年目の行事			
							男児	女児									
47	扶養町史 S61.3.30	扶養町	愛知県丹羽郡扶養町	扶養町	産み月になると嫁は里帰りをし、産む、出産が近づくと産屋を設けた。これは別屋に設ける場合とあった。出産に伴う汚水や、血の不浄を怖れる心持ちから忌むもので、特に火の忌を重大視し、産婦と手伝人の外は近づくと出来ず、21日ないし、30日前後の間きびしい別火の生活が守られた。	32日目	31日目	出生して男子は32日目、女子は31日目になると産土神まいりをす。これを「お宮まいり」「うぶすなまいり」などという。この日までは忌がかかっている。この日までは忌がかかっている。当日は氏神へオオミキとオコワイを供え、赤子に新調のうぶぎを着せ、里の祖母がだいてお参りする。	無記述	無記述	無記述	お宮まいりまでは忌がかかっている。川を渡ったりしてはいけな	無記述	無記述	無記述		
48	村史 桑谷 H9.H12.20	村史編集委員会	無記述	桑谷村	無記述	無記述	無記述	無記述	無記述	無記述	無記述	無記述	無記述	無記述	無記述		
49	幸田町史 S49.5.4	幸田町史編集委員会	愛知県額田郡幸田町大字菱池字黒方11番地	幸田町	大正以前は産屋で産室は母屋の奥の間の敷物を除き、わらごもを敷き、床蒲団を畳し、巻きわらにもたれ、天井や梁から方網をつるして産んだが、大正中期から産室も免許制となり、臥産を避けるため臥産が一般に行われるようになった。	33日目	33日目	33日目に産土神社に祖母が里方の親から贈られた晴れ着をきせて参りする。この日里方の祖母や近所の子供が連れ添って参りする。菓餅(おひねり)を神酒をそなえ、子供には菓子などを振る舞うこともある。	無記述	無記述	無記述	無記述	無記述	生後満一か年でこの祝いをするが、この日祝いの餅を背負って立つ子は健康優良児、またこの時子供に黄八丈の晴れ着をきせ本膳で参進する。親が参ると子供が目が奪ねると子供が目の前性を語るなどと伝えられている。	無記述	無記述	無記述
50	額田町史 資料集10 額田郡誌 編集資料 調査書一 H10.3.吉	額田町教育委員会 額田町史料編集室	額田郡額田町大字 櫻山字原 新田98	額田町	男女産ル、モ産婆免許ニアラズノ類ム者ハ極メテ稀ニ、一割位ノモノナリ、其他ハ大抵近隣ノ年寄方處置スルナリ、	無記述	無記述	宮参 百十日二行フ、	無記述	無記述	無記述	無記述	無記述	誕生 惣額ノ子二行フ。	無記述		
51	三和村誌 S9.4.29	編集正義	岐阜郡三和村大字 新村字元 屋敷161番地	三和村	取り上げ婆と稱する者幼産婦の役を力む、村に取り上げ婆あざむく時、近隣の婦女特に経験ある者に依頼す。	32日目	33日目	出産第33日産見始めて氏神に参拝す、母子不伏の場合には延期、男子は殊に32日目に参らるる。	無記述	無記述	無記述	無記述	無記述	産見出生一週年に當り親戚知己を招き祝宴を開く、また産見第一の新年を迎ふる際、里方及親戚男子なれば嫁慶月、女子なれば産白と稱するなれば産白と稱する掛飾りを贈る、破産弓には弓矢武者人形、毬臺には毬羽子坂具他のものを配列す。	無記述	無記述	無記述



No.	資料名	発行年月日	編集・編纂	住所	地域	出産	産明け		鳥居参り(宮参り)	橋渡し・橋越し	インノコ	川関連	井戸関連	一年目の行事	
							男児	女児							
56	旭町誌 通史編	S66.3.31	旭町誌編 集研究会	愛知県東 加茂郡旭 町大字小 渡字船戸 15-1旭町 役場	牛地 上中切 上切 浅谷	長子であっても婿家のへや(オ ク)で出産をした。ムラにはト リアアケハアサンがおひ、産婆を 頼むようになったのは大正以降 のことである。夫は屋外に出て、 お産には立ち合わなかった。へ ヤの床にはスノコになっており、 ゴザ(後には畳)を上げ、藁布団 を敷いて、背に藁を当てて座つ た。お産だ。この時、借り受 けた安産の神を祭るか、家の神 仏に灯明やロウソクをともした。	33日目	28日目	男児は33日目、女児は28日目で ヒアケ(高明け)になる。ヒアケ までをオヒヤ(牛地)・ウアヤ(上 中切・上切)という。産婦は デイの仏参りを遠慮した。また、 よその家の勧居も請がず、家族 のものもお宮の烏居をくぐらな いようにした。ヒアケになると、 湯水をナルテン(南天)の葉につ け、台所や庭などを浄めた(牛 地)。この日、産婦と、孫を背 負った姑は、餅をもって嫁の実 家へキヤクに行く。餅はオキモ リや初着を贈った家にも配った。 宮参り・初参り・ヒアケ参りは、 ヒアケが百日目にするが、氏神 さんの本祭りまでは、宮参りを しないムラもあった(浅谷)。	無記述	無記述	無記述	無記述	無記述	初産生には、子供を ミ(俵)に入れ、産生 餅を背負わせると早 く立つとか、子供を ミの中に入れ、そこ へ産生餅を投げ入れ て、餅にかじり付い たり、立つたりする 子はよく育つといっ た(牛地)。
57	旭町誌 資料編	S55.3.31	旭町誌編 集研究会	愛知県東 加茂郡旭 町大字小 渡字船戸 15-1旭町 役場	旭町	無記述	無記述	無記述	無記述	無記述	無記述	無記述	無記述	無記述	
58	下山村史 資料編 別巻	S16.8.20	東加茂郡 下山村誌 編纂委員 会	東加茂郡 下山村大 字大沼字 越田和/1 番地	下山村	初産は里へ歸つて生むのが多い。 此の場合産婆の禮は里方が行ふ。	33日目	33日目	33日目に里からもらつた臍衣を 着せて氏神に参拜する。神参り 後間も無く里方へ新密に行く。 此の時餅又は赤飯を持参して里 方の近縁者に配る。初衣の禮を 意味する。	無記述	無記述	無記述	無記述	無記述	
59	東加茂郡 下山村誌	S16.8.20	東加茂郡 下山村誌 編纂委員 会 柳原彌造	東加茂郡 下山村大 字大沼字 越田和/1 番地	下山村	初産は里へ歸つて生むのが多い。 此の場合産婆の禮は里方が行ふ。	33日目	33日目	33日目に里からもらつた臍衣を 着せて氏神に参拜する。神参り 後間も無く里方へ新密に行く。 此の時餅又は赤飯を持参して里 方の近縁者に配る。初衣の禮を 意味する。	無記述	無記述	無記述	無記述	無記述	

No.	資料名	発行年月日	編集・編集者	住所	地域	出産	産期		鳥居参り(宮参り)	橋渡し・橋越し	インノコ	川関連	井戸関連	一年目の行事				
							男児	女児										
60	中京民俗 第21号 菅羽町の 民俗	S69.9.30	中京大学 郷土研究 会	名古屋 昭和区八 事本町	赤坂 萩 羽根地 区 大林地 区	産小屋はなく殆ど納戸や壁龕が産小屋の代わりとなった。納戸で産を上げて、そこにムシロを敷き、出産した。また、実家に帰って出産するのではなく、トリアゲハアサンに来てもらい嫁先で出産する人が殆んどである。用器なものとしては、子供用の小さなシモダライ・産湯用の大きいタライ・脱脂綿・おむつ・油紙などであった。萩では、納戸の奥にサンジョという三層の部屋がある筈では、この部屋で出産した。またトリアゲハアサンに来てもらわれないで妊婦一人だけで産し、ハサミを用意しておき自分でハサミを切った人もいた。納戸は畳ではなく、ムシロ・ゴザ・ナガドコ(いぐさで織ったもの)などが敷いてあった。その上に布団を二枚重ねて、そこにもたれて出産するスワリ敷いてあった。羽根地区では、出産はカクレという小部屋で内か山ぐるに産んで作った小さいコヤ(小屋)で出産する人もいた。大林地区では、オゴヤを産屋として使用する時もあった。	33日目 35日目 31日目	33日目 35日目	33日目の日に子供に宮参り用の美家から贈られた産着を着せ、姑が御洗米・御神酒を持って氏神に参りに行った。これを33日目のサカマイリと呼び、母親は氏神の鳥居の所で参った。110日は母親も一緒に拜殿まで行って参ることができた。萩では、倉戸の富士神社・赤坂の阿口神社・熊野神社などに参りに行った。宮参りの後、その日のうちに阿婆と子供で美家にオキヤクに行くところもあった。この時赤坂を持って行き、親戚や近所、産見舞いを貰った人に配った。39日目に参りに行く場合と、男の子は31日目、女の子は33日目と異なる場合もあった。どちらの場合も姑が運れて参るが、母親は美家から来た。それは母親自身が汚れているためであった。110日には、母親が御洗米・御神酒を持って運れて行った。その時、氏神の便所で小便をさせると、おむつが早く取れるとされた。	無記述	無記述	無記述	無記述	生後一年目に誕生祝をする。赤坂では、赤飯を炊き美家や血の濃い鶏臍に配った。萩では、タンジョウモチを揚ぎ、美家やお祝いを貰った家にお祝いを貰った。タンジョウモチを皆負わせて歩けるかどうかがみたり、歩けない足の裏に餅をぶつたりもし、餅をぶつたりもし、また、美家から初めて贈る餅が贈られた。着物は2、3枚贈られた。真白い袋に1斤か2斤砂糖を入れて美家に贈り、近所、親戚にも砂糖を配った。	無記述	無記述	無記述	誕生祝は、長子の時だけ餅をつけて祝ったり、また、餅をふませたりした。誕生前に歩き始めた場合はもちをせおわせて、わざとをおしたり、餅をぶつたり、肌を餅でなたいたりした。身内や隣近所にも餅をくばったが、この餅は一升〜二升どりで、同大二つ重ねてあった。
61	小坂井町誌	S517.7.1	小坂井町誌編纂委員会	小坂井町	小坂井町	お産は、悪い「なんど」でする人が多かった。納戸には竹の簀でつくった床版にわらをしき、わら灰などをに入れてつくったしとねの上で産んだ。大正のころからは、普通の運団の上に油紙を敷いて生むようになった。出産は嫁家で生むのが普通であったが、なかには里へ帰って生む人もいたが、そうした場合は「甘えている」などと陰口を言われることが多かった。お産の時は、大正以前は、町に産婆が少なかった。この老婆を「とり婆に頼んだ。この老婆を「とり婆に頼んだ」と呼んだが、大正も末ころになると産婆を頼んで生む人が多くなった。	35日目	33日目	男児は35日、女児は33日の朝、里から贈られた産着を着せて氏神様へ、姑や母につれられてお宮参りをした。	無記述	無記述	無記述	無記述	無記述	誕生祝は、長子の時だけ餅をつけて祝ったり、また、餅をふませたりした。誕生前に歩き始めた場合はもちをせおわせて、わざとをおしたり、餅をぶつたり、肌を餅でなたいたりした。身内や隣近所にも餅をくばったが、この餅は一升〜二升どりで、同大二つ重ねてあった。			